



令和4年10月29日(土)
二十五世観世左近記念
観世能楽堂



令和4年度(第77回)
文化庁芸術祭参加公演



〈花影会 今後の開催予定〉

— 第53回 春 —

令和5年4月16日(日) 13時開演

「翁」能「高砂」松木千俊 千歳/ツレ 武田宗典 地頭 武田志房

狂言「張蛸」野村萬斎

能「熊野 読次之伝 村雨留 墨次之伝 膝行留」武田友志 地頭 武田宗和

— 第54回 秋 —

令和5年11月4日(土) 14時開演

「神歌」山階彌右衛門 千歳 佐川勝貴

舞囃子「高砂 八段之舞」観世清和 地頭 岡久広

舞囃子「唐船 盤渉」大槻文藏 地頭 上田貴弘

能「関寺小町」武田宗和 地頭 武田志房



公益財団法人
武田太加志記念能楽振興財団
Takashi Takeda memorial nohgaku foundation

表紙写真「俊寛」「正尊」 いずれも武田志房／撮影 前島吉裕

番組

能

坂井 音晴
浅見 慈一
観世 恭秀

俊

寛

大日方 寛

大藏 基誠

坂口 貴信
武田 宗和

大倉慶乃助
飯田 清一
梶 宅 聡
高梨 万里
北浪 貴裕
長山 桂三
武田 友志
木月 宣行
松木 千俊
清水 義也
馬野 正基

仕 舞

芭 蕉

鶴澤 久

蟬 丸

山階 弥次

武田 宗典
武田 宗和
武田 志房
武田 友志

仕舞 芭蕉（ばしょう）

能の結末。秋の月の夜、芭蕉の精が風に吹かれつつ舞います。

仕舞 蟬丸（せみまる）

物狂となった逆髪（さかがみ）が、都から逢坂山までの道のりをさまよい行く「道行」の場面を舞います。

狂言 岡太夫（おかだゆう）

① 最上吉日のこと。舅（アド）が、智入りの挨拶があると言い、太郎冠者（アド）を呼んで準備をさせます。
② 一方、智（シテ）は舅の家に向かっていきます。

岡太夫

狂 言

大藏 彌太郎

小梶 直人
吉田 信海
善竹 大二郎

上田 圭輔

能

正尊 起請文・翔入

（しょうぞん きしょうもん・かけりいり）

正

尊

森 常好

大藏 教義

安福 光雄
曾和 正博
藤田 次郎

観世三郎太
清水 義久
野村 昌司
坂井 音雅
武田 文志

武田 祥照
関根 祥丸
井上裕之真
武田 崇史
杉浦悠一朗
田口 亮二
松木 崇俊
久田 勘吉郎
武田 章志

武田 宗典
寺井 崇
武田 尚浩

佐川 勝貴
坂井 音隆
坂口 貴信
武田 友志
関根 知孝
木原 康之
岡 久広
観世 清和

起請文
翔入

附祝言

終了予定 十六時四十分

俊寛（しゅんかん）

① 平清盛を中心に平家一門が栄えていた頃。清盛に仕える男（ワキ）が登場。清盛の娘、中宮徳子の安産を願って恩赦がおこなわれ、平家に謀反を企てた罪で鬼界が島に流されていた丹波の少将成経（なりつね）と平判官康頼（やすより）が許されると述べます。これから赦免使として鬼界が島に向かうと言い、船頭（アイ）を呼び出し舟の準備を命じます。

② 都から遠く離れた鬼界が島。信仰心の厚い康頼（ツレ）と成経（ツレ）が熊野の神々を島に祀り、島廻りをしながら祈りを捧げています。
③ 俊寛（シテ）が、わびしい流入の境遇を嘆きながら現れます。
④ 俊寛は康頼と成経のために道迎え（どうむかえ）（参詣人を出迎える宴）の酒を持って来たと言います。しかし、ここは孤島。俊寛は水を持参していたのでした。折しも時は長月（九月）九日、重陽の節句。三人は水を薬の水（酒）として酌み交わし、華やかだった都の暮らしに思いをはせ、落ちぶれた今の状況を嘆き悲しむのでした。

⑤ 赦免使の男が舟で鬼界が島に向かっていきます。
⑥ 赦免使は赦免状を持って来たと言います。しかし、ここは孤島。俊寛は水を持参していたのでした。折しも時は長月（九月）九日、重陽の節句。三人は水を薬の水（酒）として酌み交わし、華やかだった都の暮らしに思いをはせ、落ちぶれた今の状況を嘆き悲しむのでした。

⑦ 俊寛は赦免状を何度も見返しますが、二人の名前だけで、余白の書入れにもどこにも俊寛の名は書かれていません。ついに俊寛は悲しみのあまり泣き崩れてしまいました。

⑧ やがて船出の時。俊寛は康頼の袂にすがりつきますが、赦免使は言葉荒く制止します。せめては向かいの島までと頼み込む俊寛を、赦免使が櫓權（ろかい）を振り上げ打ち据えます。船は纜（ともづな）を押し切って沖へ漕ぎ出し、俊寛は渚に倒れ伏して、声をあげて涙にくれます。

⑨ 船に乗り込んだ康頼と成経。都に戻ったらしかるべく働きかけをして、帰京を叶えようと声を掛けます。俊寛は遠ざかる船を見送り、やがて人影も船影も見えなくなったのでした。

仕舞 蟬丸（せみまる）

物狂となった逆髪（さかがみ）が、都から逢坂山までの道のりをさまよい行く「道行」の場面を舞います。

狂言 岡太夫（おかだゆう）

① 最上吉日のこと。舅（アド）が、智入りの挨拶があると言い、太郎冠者（アド）を呼んで準備をさせます。
② 一方、智（シテ）は舅の家に向かっていきます。

③ 到着した智を太郎冠者を取り次ぎ、舅と智は挨拶を交わします。盃事が終わると、舅は太郎冠者に命じて蕨餅を出します。蕨餅を食べたことのない智は、氣に入って次々と口へ運びます。舅は、蕨餅を好んだ延喜の帝（醍醐天皇）が蕨餅に岡太夫という官位を与えたこと、蕨餅は朗詠の詩にも詠まれていることを言い、氣に入ったならば、おごう（舅の娘）に作らせるとよいと助言します。
④ 帰宅した夫を妻が出迎えます。珍しい物を振る舞ってもらったと夫は言いますが、名前をすっかり忘れていきます。朗詠に詠まれていることを思い出した夫に、妻が朗詠を次々とあげて、何を食べたのか尋ねます。しかし、どれも違うようです。ついに喧嘩になった二人。手を打たれた妻が思わず朗詠を口にします。それを聞いた夫は名前を思い出し、機嫌を直した妻はさっそく蕨餅を作ってくれることになったのでした。

正尊 起請文・翔入

（しょうぞん きしょうもん・かけりいり）

① 平家が滅んだ後のこと。源頼朝と弟義経は不仲となり、鎌倉から義経追討のために土佐坊正尊が都に遣わされていました。義経は家来の武蔵坊弁慶に正尊を連れてくるよう命じ、弁慶（ワキ）は正尊の宿に向かっています。

② 正尊の宿。正尊（シテ）は熊野参詣の途中病になったので、義経への挨拶が遅れたと言います。すぐに義経の館に参るように弁慶が言いますが、正尊は休みを取ってからうかがうと返答。それでも弁慶は直ちに参上するよう言い張り、断れずに正尊は覚悟を決めるのでした。

③ 義経の館。義経（ツレ）は正尊が討手ではないのかと疑い、弁慶も詰め寄ります。正尊は熊野参詣のために上京したと冷静に答えます。義経が鎌倉に入らずに途中で追いつ返された理由を問いただと、正尊は自分にはわからないと返答。起請文を書いて、自らの言葉に偽りがないことを示そうとします。

④ 正尊は起請文を書き終え、堂々と読み上げます。
⑤ 偽りの起請文であると義経は気付いていますが、正尊の文才を称えて盃を与えます。静御前（子方）が正尊に酌をし、舞を見せます（中之舞（ちゅうのまい））。

⑥ やがて正尊は退出。義経たちも寢所に入りました。
⑦ 弁慶が侍女（アイ）に正尊の宿の様子を偵察するよう命じます。夜討の準備を目撃した侍女は弁慶に伝えます。

⑧ 弁慶は義経に報告。義経は動ぜず、静は大鎧を差し出します。門を開いて、寄せ来る敵を待ち受ける義経たち。
⑨ 正尊とその家来たちが斬って出、戦闘が始まります（斬り組）。

⑩ 弁慶と姉和光景（ツレ）（あねわのみつかげ）の戦い。
⑪ 味方がごとごとく討たれ、正尊は馬を下りて義経に迫ります。太刀を振るう義経、応戦する静御前。退く正尊を弁慶が追い詰めます。正尊は弁慶に投げ伏せられ、遂に生け捕られてしまいました。義経は見事、正尊を退けたのでした。

【本日のシテのご紹介】



撮影：前島吉裕

かんぜ やすひで

《能「俊寛」シテ》 観世 恭秀

シテ方観世流。重要無形文化財（総合指定）保持者。

昭和17年生。故・観世友資の次男。故・二十五世宗家観世左近に師事。昭和22年、能「鞍馬天狗」花見で初舞台。「翁」「鷺」「姨捨」など多くの重習曲を抜き、令和3年には能の最奥曲である「関寺小町」を開曲。私立暁星中学校・高等学校にて、故・浅見真州、武田志房と同期。

うざわ ひさ

《仕舞「芭蕉」シテ》 鵜澤 久

シテ方観世流。重要無形文化財（総合指定）保持者。

昭和24年生。父故鵜澤雅、故観世寿夫、故八世観世鍬之丞に師事。3才初舞台 仕舞「猩々」、「石橋」「乱」「道成寺」「卒都婆小町」「檜垣」を被曲。令和5年「姨捨」を被曲予定。平成30年観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。北米、カナダ等大学よりの招聘を受け公演、ワークショップを行う。現代演劇など新しい試みにも積極的に出演し、これまで能楽師としての地歩を固めつつ、能役者としてのあるべき身体を探り、より良い舞台成果を上げるべく、精力的に活動中。

やましな やじ

《仕舞「蟬丸」シテ》 山階 弥次

シテ方観世流。重要無形文化財（総合指定）保持者。

大正14年、600年続く能楽の旧家・山階家に生まれる。十世 山階徳次郎の孫。山階修 長女。十一世 山階信弘に師事。昭和23年2月女性で初めて観世流玄人として認められる。平成19年2月山階弥次襲名（弥次は山階家の古い名跡）。東京音楽学校（現、東京芸大）卒業。1998年度 東京女性財団賞受賞。平成25年文化庁長官表彰受賞。

おおくら やたろう せんとら

《狂言「岡太夫」シテ》 大藏 彌太郎千虎

狂言方大蔵流。重要無形文化財（総合指定）保持者。

昭和49年生。二十五世 大蔵彌右衛門の長男。祖父（故）二十四世 大蔵彌右衛門及び父に師事。5才「以呂波」にて初舞台を経て、末広がり、千歳、那須、三番三、釣狐、花子を抜く。平成10年、宗家に伝わる幼名「千太郎（せんたろう）」を襲名。平成28年、成人名「彌太郎、千虎」を襲名。公益社団法人能楽協会理事。一般社団法人狂言大蔵会 代表理事。

たけだ ふみゆき

《能「正尊」シテ》 武田 文志

シテ方観世流。重要無形文化財（総合指定）保持者。

昭和52年10月19日生。武田志房の次男。父、二十六世宗家観世清和、故・野村四郎幻雪に師事。3歳にて初舞台を踏み、これまで「石橋」「乱」「道成寺」「望月」「安宅」「翁」「求塚」を抜き、近年では「隅田川」「定家」「道成寺赤頭」「屋島弓流」等、多くの大曲に積極的に挑み続けている。公益財団法人武田太加志記念能楽振興財団 専務理事。

撮影：藤本礼奈

【解説】

能〈俊寛〉

〈俊寛〉は『平家物語』を素材にした作品です。俊寛は後白河法皇の近臣の一人であり、法勝寺の実務責任者でした。都東山の鹿ヶ谷で藤原成親（なりちか）（丹波少将成経（なりつね）（ツレ）の父）・平判官入道康頼（やすより）（ツレ）・西光（さいこう）らと平家打倒の密議を重ねるも事が露見し、鬼界が島に流罪となりました。平清盛は、俊寛と一緒に鬼界が島に流罪とした成経・康頼は許す一方で、自分の口添えによって出世したにもかかわらず謀反に加担した俊寛に強い怒りを感じ、ついに恩赦を与えませんでした。『平家物語』では、俊寛は僧侶であるのにも猛々しく傲慢な人と描写され、さらに康頼と成経が熊野権現を勧請して帰京を熱心に祈るのに対して、俊寛だけは「天性不信第一の人」であったので、神に祈ることもなかったと見えます。『平家物語』と能〈俊寛〉では筋は同じですが、俊寛だけが許されず島に残される理由を、『平家物語』は俊寛の性格や態度に置いています。

しかし能では、なぜ俊寛だけが許されなかったのか、その理由を明確にしています。鬼界が島は鹿児島県薩南諸島の一つ、今も噴煙を上げる火山島硫黄島のこととされます。中世には日本の境界の果てであると考えられていました。そのような島に、理由も告げられず一人取り残されることになった俊寛。その絶望はいかばかりだったでしょう。能は俊寛の心を場面の進行に従って描いていきます。赦免使到着から浜辺で二人を見送る時までの間に、俊寛の心は喜び・期待・不安・絶望・怒り・嘆きなどと変わっていきます。単に『平家物語』を舞台化するのではなく、極限状態に追い込まれていく人間の心情、そのものを表している点に能の特色があります。

『平家物語』との違いはほかにもあげられます。能には赦免使の到着前に、俊寛が三熊野参りをしていた康頼と成経を出迎える場面があります。長月の長陽の節句、九月九日の菊花の宴の風情が醸し出される場面です。謡の「彭祖（ほうそ）が七百歳を経しも」「飲むからに、げにもと薬と菊水の」などから、〈俊寛〉と慈童説話の関係が指摘されています。能の〈菊慈童〉や〈枕慈童〉に描かれる慈童説話が〈俊寛〉に出てくるのは、季節が秋というだけでなく、俊寛たち流人の状況を重層的に描くためと思われる。観世流の〈菊慈童〉では省略されている事柄もありますが、慈童説話は古代中国周の穆王（ぼくおう）に仕えていた慈童が王の枕を越えてしまい、酈縣山（れっけんざん）に流罪となるも、菊の下葉に記した経文の功德により七百歳の齢を保つ話です。慈童と同じく俊寛たちも流罪の身の上であること、人が生きて帰れない場所とされる酈縣山と、「今生よりの冥途」と謡われる鬼界が島が重なります。しかし菊の経文の功德によって命を保った慈童に対して、俊寛には救いはなかったのは対照的です。

能では通常、生きている成年男性の役は面をつけませんが、俊寛の役はその名も「俊寛」という専用の面を用います。過酷な島の暮らしによる憔悴や絶望という極限状態の人間の様を表すために、面は効果を上げていると思われます。能面の表情にもご注目ください。

仕舞〈芭蕉〉

芭蕉の精が袖を返すと、秋の風が寂しい古寺の庭の草や女郎花、刈萱に吹きつけます。すぐに山嵐（やまおろし）や松風が庭の草々を吹き払うと精の姿は消え、跡には風に破れた芭蕉の葉だけが残っていました。風の吹きつける様子を扇で印象的に表します。

❁ 仕舞〈蟬丸〉

皇女でありながら物狂となつてゐる逆髪。花の都を出発し、逢坂山へ向かう「道行」です。賀茂川・白河・粟田口・松坂・音羽山……と、道程の地名が織り込まれた美しい謡。逆髪が走井〔泉の名〕（はしりい）に姿を映す所作にも注目です。能では、こののち逆髪は逢坂山で弟皇子の蟬丸と再会、そして別れて行きます。

❁ 狂言〈岡太夫〉

賀入りは結婚後しばらくして、初めて夫が妻の実家を訪ねて妻の親と盃を交わす儀礼です。賀入りには縁起の良い日が選ばれ、舅が準備を整えて待ち受けます。そのようなめでたい場に出された蕨餅は、現在でも人気の和菓子ですが、既に中世の時代から食されていました。曲名である蕨の異名は、蕨が生えるのが岡であることに拠り、「太夫」が位の名です。

この狂言でいう「朗詠」は、平安時代に藤原公任（きんとう）が和歌と漢詩の一部を撰んで編纂した『和漢朗詠集』に所収され、声に出して詠われます。これらの詩は平安文学のみならず謡曲や歌謡などにも大きな影響を与えました。妻が夫に尋ねた朗詠と食べ物は、次のようなものです。「池の氷の東頭は風わたつて解け、窓の梅の北面は雪封じて寒し」の「梅」から連想して「梅干」、「気晴れては風新柳の髪をけずり、氷消えては波蕾苔（きゆうたい）の鬚を洗う」の「鬚」から「苔」、「鶏すでに鳴いて忠臣旦（あした）を待つ」の「鶏」から「酢あえの鶏冠海苔（とさかのり）」（刺身のつまになる赤色の海藻）。ここ

討を何としても果たそうという強い心が正尊を動かしています。今回の公演では「起請文」の小書（特別演出）（こがき）が付いています。近年はこの小書を付けることが多いのですが、付いていないと正尊は起請文を読まずに弁慶が読む演出になります。起請文は七五調ではない散文ですので、それを能として謡うために音楽的に非常に難しい、特殊な節扱いになっています。それゆえ同じく散文調の謡である、能〈安宅〉の「勸進帳」、能〈木曾〉の「願書」と共に「三読物（さんよみもの）」という大切な習いとされています。

迫力にあふれた起請文の場面の後は、静御前による白拍子舞（中世の芸能）です。能では「中ノ舞（ちゅうのまい）」で表されます。それまでの剛の場面とは対照的な柔の場面となり、舞台に彩りが添えられます。静は美しい舞を見せるだけでなく、義経と頼朝の仲に隔てはなく、心は通い合っている、それを頼朝に伝えるよう正尊に言います。静もまた正尊の心の内を読んで諫めている場面です。

前半は義経・弁慶と正尊の言葉の戦いともいえる場面でしたが、後半は実際の戦闘です。特に今回は小書「翔入」の演出。常にはない「斬り組」の場面が入り、戦いの凄まじさをより強調します。常の〈正尊〉でも正尊方の姉和（あねわ）と弁慶の戦い、正尊と刃を交わす義経と静御前、正尊と弁慶というように、長い戦い場面の中で対戦相手が変わっていきませんが、そこに大勢による「斬り組」が入り、より変化の付いた見どころになっています。

さて、正尊は覚一本『平家物語』では藤戸合戦に臨む源範頼（のりより）の軍に昌俊（しょうしゅん）の名で見えますが、様々にある『平家物語』の諸本では正尊の経歴に異なる説があがつており、不明な点の多い人物といえます。しかし正尊の義経襲撃は、鎌倉幕府による歴史書『吾妻鏡』の文治元年（一一八五）十月十七日条に書き留められる史

までは朗詠が引用されているのですが、とうとう妻はじれったくなくて、口にする朗詠もなんだかおかしいものになっていきます。最後にやっと「紫塵（しじん）のわかき蕨は人手を握る」の「蕨」から「蕨餅」へと繋がります。この狂言に出てくる朗詠は能にも引用される有名な句ばかりですが、雅な朗詠から俗っぽい食べ物を連想させる面白さがあります。

❁ 能〈正尊 起請文・翔入〉

源義経の伝承を能にした作品です。見どころが多く、手に汗握る展開が続きます。冒頭から登場人物の対立が描かれます。義経の館へ参上を強くうながす武蔵坊弁慶。その言葉をかわすように自分は病であると作り事を述べる土佐坊正尊。しかし強引な弁慶に折れて自分の運命に腹をくくります。館では義経も加わり、正尊の真意を厳しく問いたしますが、正尊はしぶとく持ちこたえます。ここまでは謡ではなく、台詞を中心に進んでいきます。言葉の調子や間（ま）、勢いに三人の心情が込められている場面です。

ついに正尊は起請文を記して、都に上った理由が義経追討ではないことを証明していきます。起請文は、あらゆる神仏の名をあげて嘘偽りのないこと、約束を誓う文書です。偽りであった場合に受ける罰についても記されます。中世では、同盟や任官、裁判などさまざまな誓いにおいて用いられ、時には書いた起請文を焼いてその灰を飲んだり、神社に奉納したりすることもあったそうです。人々が起請文の重要性和神聖さを意識していたことがうかがえます。能〈正尊〉では誓いは偽りであるのに、正尊は堂々と起請文をしたため読み上げます。たとえ神仏の誓いを破ってでも、この場の追及をかわして義経追

実とされます。この事件は、能以外にも『平家物語』や『義経記』、幸若舞曲（こうわかぶきよく）（室町から江戸に流行した芸能。戦国武将にも愛好された）の『堀川夜討（ほりかわようち）』に描かれています。能は『平家物語』・『堀川夜討』と近い関係にあると考えられています。特に『堀川夜討』は正尊という名が同じあること、起請文読み上げの場面があること、弁慶と戦う姉和という武士が登場することが能と共通しています。

〈正尊〉の作者は、室町時代末期に活躍した観世座のワキ方観世弥次郎長俊（ながとし）。父の信光（のぶみつ）は能〈船弁慶〉や〈遊行柳〉等の作者として知られます。父と同様に長俊も能〈江野島〉〈大社（おおよしろ）〉〈輪藏（りんぞう）〉等を作っています。彼の能は、多くの人物が登場し、視覚的に強い印象を与えるのが特徴です。〈正尊〉でも複数の登場人物それぞれの見せ場が作られています。実は長俊作の能には、謡本は伝わるものの上演が途絶えているものもあります。たとえば兄弟の稚児が敵討ちを果たす（親任（ちかとう））、奥州が舞台の〈広元〉などがあり、これらには「斬り組」の場面が設定されています。各地で戦乱が起こっていた室町時代の末に、長俊が武士たちの激しく斬り合う能を多く作っていたというのも興味深いところ です。

中司由起子（法政大学能楽研究所兼任所員）